

サービスラーニングによる文藻外語大学の地域貢献に関する一考

察

—学習意欲と教育効果について—

少子高齢化による「大学全入時代」の下で、従来の大学教育の機能や地位が新たな挑戦を受けることになった。大学教育をより多角的に発展する社会の要求に応じるため、大学の活性化と地域社会の発展が重要な課題となった。大学への社会的役割または貢献の期待の中で、大学の使命の根幹である教育と研究の展開の上に、社会連携が大学の第三の使命として重要視された。その中ではサービスラーニング(以下 SL)は地域での活動経験と大学での学術的な学習との統合を目指すものであり、大学が人材養成を通じた社会貢献というものとも言える。これを引き続き、2017年に教育部はさらに「大学社会責任実践」計画を公布し、それを試行と実施の二段階に分け、各大学による「大学社会責任実践計画」(USR 計画)の実施を通し、大学の活性化と社会の発展に大いに寄与している。

これを受けて、文藻外語大学日本語文学科は地元の住民による日本語学習への要請に応えるため、2011年から従来、選択科目としての「日語教授法(上半期)」と「日語教学演練(下半期)」のコース構成を変え、SLの科目として実施し始めた。その教育実習の対象は大学の地域住民である。

2011年から今まで、文藻外語大学日本語文学科で実施してきたSLの実施状況はいかなるものか、またいかなる問題を直面しているかが検討する必要がある。したがって、本研究ではSLの受講生と地域住民を対象として受講生にアンケート調査、地域住民にアンケート調査と学習度測定を行い、学生の経験による教育効果と地域住民の学習意欲と学習効果を明らかにしようとした。その結果として、実際の活動経験の中で知識を活用することを通じて、深い学習成果として定着し、学生の社会性を促すことができる。その一方、地域住民の高い学習意欲から見れば、文藻外語大学日本語文学科によるSLの実施は有意義であると言える。